（第3種郵便物認可）

文芸プラザ

短編小説

鮒の眼

今井　隆

石部健吉と一瞬、目が合ったような気がした。

「ピリンコちゃんたち、元気か」と、石部健吉が言った。その年で、その言い方はないだろうと思って笑うと、石部健吉がじっと我を見ているような気がした。

「今、笑ったような感じだったけどなあ。不思議だ」と言ったので、我は驚いて口を閉じ泡装飾の裏に隠れることにした。そして、石部健吉の動物的な勘に少なからぬ恐れと大いなる共感を持った。この珍奇な主人がとても好きになったのである。

石部健吉は、昼ご飯を食べると三十分ほど横になって寝息を立てていたが、柱時計が一時を打つといきなり起き上がって胸を二三回後ろに回してから、背伸びをした。

「さて、午後からもがんばるぞ」と声を出して、手ぬぐいで作った捻り鉢巻を巻いて出て行った。

石部健吉が居間から去ってしまうと、途端に寂しくなってしまった。我は、退屈しのぎにぶとと、話すことにした。ぶとは、相変わらず寝ているのか起きているのか分からないような目をして、沈められた炭の上で頭を斜め上にしてじっとしている。泥鰌という魚は、浮き袋がないので常に水中を泳ぐことは困難であるから、いつも水底にじっとしている。むやみに動く必要がないということは、太るという遠因でもある。彼らを見ていると、泥鰌同士の会話というものがほとんどない。時々出会い頭に、髭で相手を確認しているような仕草を見せるのが、唯一の仲間同士の挨拶なのかも知れない。比べてみると、我々鮒はとても仲が良い。幼いピリンコの時代は、必ず群れて泳ぐ。集団で暮らせば誰かが危険を察知して、すばやく難を逃れることが出来るのである。

共同社会という点では人間に似ていないこともない。ただし、鮒社会には殺魚も盗難も詐欺もないのである。しいて言えば、餌を見つけたときに誰が食べるかという多少の争いがあるが、そんなものは先に食べたらおしまいですぐに争いは終わってしまうのである。

泥鰌の場合は、どうして個で生活しているのかという話しをぶとに吹っかけて、人間社会の機微に関するもっと深い会話を楽しもうと目論んだのであるが、たびたび退屈そうに欠伸をするので、馬鹿らしくなって話しかけるのは止めた。人のいない退屈な部屋の中で、我は水槽の中を仲間と散歩しながら時を過ごした。

夕食時になって家族が居間に集まってきた。

「今年のトマトが相当に悪いから、困ったよ。このままだと、俺の給与も半額になってしまう」と石部健吉が言って、おもむろに子どもたちの方を向いた。

「テニス部の部費も払えないから、辞めてもらわないといけなくなるかも知れんぞ」

暇があるとテニスの素振りの真似をしている大地君達は、とても驚いた顔を作って抗議の声を上げた。

「サラリーマンだったら、こんなことはなかったも知れないな」と石部健吉が言うと、加寿子さんが「あなたが自分で選んだ道だから、がんばるしかないんじゃないの。言っておくけど、私は反対したんだからね」と応える。

「だけど、俺の選択は間違っていなかったと思うよ。そりゃ、収入は半分ほどに落ちたけど、背広も要らないし接待ゴルフをやることもないし、付き合いで酒を飲みすぎることもない。残業もないから、健康にとても良いし、長生きするんだったら絶対に農業だね。あの頃は心が萎んでしまって、自分でコントロールが出来ない状態だったからな。本当に、辛かったよ」

「山邑証券にいたときは、本当に帰りが遅かったわね。子どもが出来てからは気が紛れたけど、あなたが遅いから一人で食事をして、シーンとした家にいてただあなたの帰りを待つのは本当になんとも言えない寂しさがあったわ」

「あの頃は辛い日々が続いたね。自分で言うのも変だけど、エリートコースを歩いていてひょんなことから部下から総すかんを食らっちゃってね、それが誤解だということが分かってからでも、一度出来上がった俺に対する見方は、そんなに簡単に消えなくってね」

我が「聞き耳」を立てていると、大地君が急に「僕、英語六十五点だったよ」と言ったものだから、あっという間に話題が移ってしまって残念だった。

それから幾日か経って、興味深い話を聞くことが出来た。我は、家族の会話に飽きていた頃だったので、とても刺激になった。

ことの起こりは、急に来た石部健吉の友人が居間に上がったことからである。

友人はすぐ近くに住んでいるトマト農家である。石部健吉と気が合うらしく、月に二三度は来て酒を飲みながら語り明かして、時には午前様になる。魚なりに疲れるときもあって時には迷惑するのであるが、人間社会の情報を得る点ではとても有意義である。

友人はひとしきりトマトの出来具合について話した後で、山の境界で揉めているのだ、と言った。山境を良く知っている古老が生きているうちに山の境をはっきりさせておかないと、その内に誰の山か分からなくなるというので、町役場が音頭を取って、山林の所有者がまとまって山に登り境に杭を打つ作業を始めたまでは良かったが中に強欲な人がいて、境はここだと言い張るので作業がちっとも進まない、と愚痴をこぼした。

石部健吉は、「少し位の土地がどうしたんだよな。もともと山には境などなかったんだから、少しのことで欲を張るなんて全くくだらない。頑張っても、何代か先には家が破産することだってあるんだし、第一、代が変われば先祖なんぞそれほどありがたく思わないのになあ」と言った。

我の生まれた精美川は御嶽山に源を発しており、最近、スキー場建設による土砂の流入で本物の清流とはいえなくなってきたが、それでも見た目はとても綺麗な流れであって、これはひとえに山の恵みによるものであることを感覚的に理解しているので、友人と石部健吉の会話を興味深く拝聴した。

「それにしても、今の山は酷いなあ」と石部健吉が言って、言葉を継いだ。

「植林された檜がびっしりと山を覆って、草や灌木が生えるすきはないからな。

やっぱり、山は針葉樹と広葉樹が混じった混交林が一番だよな。秋になると広葉樹が葉っぱを落として良い土を作るし、雨水が腐葉土に染みこんで長い時間をかけて谷に流れ出るだろう。洪水も起こらない。どんぐりや山栗なんかはさ、鳥や動物のえさになるし、いざとなったら人間の食料にだってなり得る。江戸時代の飢饉の時には、山里の人は木の実のおかげで飢え死ぬことが少なかったらしいよ。秋には、きのこが生えて、春にはぜんまいやこごみ、たらなんかが食生活を豊かにしてくれているし……」

我は石部健吉の言葉に引き込まれていたが、さらに感動することを言ったのである。

「山に自然が戻るとさ、さっきも言ったように谷の水量が一定になり、栄養分を含んだ谷水に水生昆虫が棲むようになるだろう。そうすると、それをえさにしていろいろな魚が溯くように増えると思うよ。鮎なんかも、小さな谷まで登っていくんじゃないかな。

人間様にとっても山は大事で、山に入れば気持ちは穏やかになると思うよ。森林浴の効果が科学的に証明されているけど、自然の中で暮らしてきた何万年という生活習慣が、おそらくは人の遺伝子の中に組み込まれていて、だから自然の中にある梢のささやきや大地の柔らかさ、頬をなでる風なんかが人の琴線を刺激するんだろうな。人々はやがて自然に畏敬し、人のいかに小さいものであるかを知ることになって、自然の神秘を知ったものは、心穏やかで諍いを好まん。人類に平和が訪れるというのは、荒唐無稽なことだろうか」

石部健吉は、自分がいかにも大層なことを言ってしまったというように苦笑いをした。

それにしても我は人間の話す言葉というものが羨ましくて仕方がないのである。言葉は時には愛を語ることも出来るし、心穏やかに慰めることも出来る。このような便利な発明品をもっと大切にしたら良かろうと、魚である我は思う。しかしながら言葉は、使い方によっては強力な武器となって相手の心深く入り込み、棘のように心に刺さってしまう。テレビなどで報道される事件の多くは、言葉に起因していると我は思っている。

我達魚類が言葉というものを持っていないことは自明であり、口はもっぱら食べるための道具であるにしても、少なくとも諍いの元だけは作りようがない。態度はもっぱら目で表明するしかないのである。我はこれで十分だと思っている。人間の社会でも、目は口ほどにものを言い、という諺があるようだが、魚社会では、「目がものを言う」わけである。

さて、友人との会話は、酒が入ったことによりずいぶんと盛り上がっているが、どうも聞いていると先ほどから繰り返しが多くなってきた。我は酒というものを呑んだことがないので、いかほどに美味なのかは分からないが、二人の様子を見ている限り我は呑みたいとは思わない代物である。

時計が午前零時を打った。加寿子さんが、「私はもう寝ますからね。あなた風呂の種火だけはちゃんと消してね」と石部健吉を睨むように見下ろしてから、友人に向かって「ごゆっくりなさって下さいね」と、とても本心とは思えない言葉を投げかけて、階段を上がって行った。

石部健吉と友人は、一瞬同じように首をすくめたが、それからは重石が取れたように先ほどよりも饒舌になった。

友人が、「健吉は小学生の頃からどこか変わっていていてな、そう言えば先生もこの間の同窓会で、何かをやる子だと思っていたけど、なんて話していたぞ。エリートコースを歩んでいた旧帝大出のお前が、俺と同じようにトマトを作り出すなんて、本当に俺は嬉しいよ。まあ、飲め。お前んちのビールで悪いが……」などと言いながら、ビールを注いでいる。石部健吉は上機嫌で、「いやぁ、実を言うとね、俺は水飲み百姓の倅のくせしてな、百姓が嫌いでね。考えてみたら、ずいぶんと金に毒されていたんだよな。死んだ親父のことを完全に馬鹿にしていたから、親子間の心の繋がりが少なかった。親と金のありがたみは、なくなってから分かる、というのは本当だなあ」と言った途端に涙声になった。

「おい、お前は泣き上戸か」と言ったなり、友人も妙にしんみりしてから、口を開いた。

「まあ、お前んちの仲の悪さは俺も知っていたけど、こうして立派に農業をしてる姿を見りゃ、死んだ親父さんも喜んでくれているよ」

「それでは遅いんだよ……」と石部健吉は言って、また涙声になった。

「馬鹿だな、お前は。死んだ子の年を数えても仕方がない、という諺があるだろう。増してや、親が先に死ぬのは当たり前で、順番どおりなんだからそれでいいじゃないか。子どもに死なれた親の立場、と言っても俺もなったことがないから分からないけど、まあ、そういう立場にゃ立たされなかったんだからな」

最近は、不況が長引いて何を作っても売れないという状況が蔓延しているらしく、物作りをしている会社といわず自営業者といわず、大変な苦労をしているようである。何せ、一年間で自殺者が三万人を超える状況になっていて、しかも経済的理由からの自殺が急激に増えている。石部健吉の住む集落でも、サラ金の借金で破産したとか、農家がよからぬ利殖話に手を出して、農地のみならず家屋敷も取られてしまったとか、そんな話を聞くような時世になっている。魚社会では、決してそのようなことが起こりうるはずがないので、その点は素直に喜んでいるにしても、石部家がそのようになってしまったら、我らの命も風前の灯火になることは間違いないので、他人事ではないのである。

季節は移ろいで行き、秋風にどことなく次の季節を感じさせる冷気が混じりだした頃、我は肝を抜かれるほど驚いたことがあった。居間のカーテンが開けられて、ちょうど朝日が水槽を照らしていたときである。座っていた石部健吉が突然、「オー」と大声を出したのであった。声が水槽中にぐわんぐわんと木霊して、我のみならず仲間達も泥鰌たちもざわざわしたほどであった。

「こりゃ、動く宝石だ。すごいものを見た」と石部健吉が言った。何の事なのか直ぐには分からなかったのであるが、どうも我の目を注視していることからして合点がいった。つまり、我の飛び出した眼球に朝日が当たって、それが宝石のごとくにきらきらと光ったというだけのようである。こんなことにさえ感動してくれる石部健吉のことを、ますます我は好きになってしまったのだ。

我は体長が十センチほどになるまで、年数にして三年間であるが、水槽の中で過ごすことになる。この間、ぶとの仲間と我ら鮒の仲間が二匹ずつ死んだ。

石部健吉も心を痛めていたようではあるが、我もとても寂しい気持ちになった。特に一緒に遊んだ鮒が、故郷の川に帰りたい、と眼で言ってから死んだ時にはかなり落ち込んだ。そんなことがあった数日後に、石部健吉は物差しを持ってきて、我たちの長さを計ったようである。そして呟くように言った。

「こいつらも、川に返した方がいいのかなぁ」と。

さてこの後、我は数奇な運命を辿ることになるのであるが、残念ながらとうとう紙面が尽きたので、これ以上記することができない。機会があったらこの続きを話すことを約束して、ひとまず終わることにしたい。

（了）

いまい・たかし　昭和30年、岐阜県益田郡（現下呂市）萩原町に生まれる。農林水産省に勤務するかたわら、30歳ぐらいから小説、詩、ルポなどを書き始める。文芸同人誌「案夢」主宰。短編で、「岐阜市文芸祭賞」受賞。平成12年に水稲新品種「龍の瞳」を発見して育成。19、20年と、お米の食味コンクールで日本一に輝く。現在は、（有）龍の瞳の代表を務めながら、森の再生などを夢見る。